

身著  
 空花衣  
 足履龜毛  
 履手把鬼角  
 弓擬射無明鬼

Über den Bergen, wot er wandern  
 Lente, wohnt das Glück, ach, und ist  
 über den Bergen, kam mit verweirten Augen  
 Lente, das Glück mit haben, sagen die Lente,  
 Carl Base.

一九三三年三月以降

愚詩百篇

他大愚詩百

篇不載

之。

田中克己遺稿集

詩  
集

支那

暗い<sup>アヤシ</sup>宛告<sup>ウツガシ</sup>の工房にわたしは日々をくらさねはならぬ。さて

懸命に彫るは何であらう。堆<sup>うたがひ</sup>く積まれて青白く光るは

亀甲<sup>じかく</sup>兕<sup>じ</sup>角<sup>かく</sup>牛骨<sup>ぎゅうこつ</sup>鹿角<sup>ろかく</sup>。わたしは輝く小刀<sup>こがたな</sup>をもち日に日と

殷<sup>いん</sup>代<sup>だい</sup>象<sup>しょう</sup>形<sup>けい</sup>文字<sup>もんじ</sup>をその上に彫る。貞<sup>てい</sup>衆<sup>しゅう</sup>有<sup>いう</sup>災<sup>さい</sup>九<sup>きゅう</sup>月<sup>げつ</sup>魚<sup>ぎょ</sup>心<sup>しん</sup>

彫<sup>ほ</sup>れば骨<sup>こつ</sup>粉<sup>こな</sup>はゆが膝<sup>ひざ</sup>につもりその<sup>かみ</sup>幽<sup>ゆう</sup>かな匂<sup>におい</sup>ひにもいまは慣<sup>な</sup>れ

てしまった。さて或日わたし畫<sup>え</sup>の北<sup>ペー</sup>平<sup>ピン</sup>の街<sup>まち</sup>衢<sup>ぢ</sup>をゆき、おとや

きずりに見た殷墟<sup>いんこ</sup>甲骨<sup>けいこつ</sup>文字<sup>もんじ</sup>の拓<sup>たく</sup>本<sup>ほん</sup>まぎれもなくわか刀<sup>や</sup>の

跡<sup>あと</sup>なれどその魚<sup>ぎょ</sup>の字<sup>じ</sup>や獸<sup>じゅう</sup>の字<sup>じ</sup>が薄<sup>うす</sup>くて涕<sup>てい</sup>涙<sup>なみ</sup>流<sup>なが</sup>れて止<sup>と</sup>まな

んだ。わたしは明日も亀甲<sup>きこく</sup>兕<sup>じ</sup>角<sup>かく</sup>を彫<sup>ほ</sup>るであらう。

父と母と

妹よ。この寫眞をこらん。肋骨のついた軍服を着てゐるのは、ほら次の間にいひきをかいてゐるわね。達達の父さんで、支那服を着た女のひとが母さんだ。母さんはいまは狐のやうに葉せんび終つたか。昔はきれいだったね。ま、今ほど十年のよらない頃、さう、僕  
の十二三のころ。かあさんはよく喀喇沙里蒙古の故園のはなしをし

て下さつた。かあさんの故園には春になると瑞香花がむせか

へるばかり。白くてその蔭に母さんは外國から来る金盞花や

蕃薇や鬱金香を植ゑた。王府の穴に黄色く濁つて土

埃が舞ひ上つてゐた。その時母さんは喀喇沙里王(わねし達のあ

祖父さん)に連立った日本の士官を見た。それがわねし達のあ

父さん。その頃はすうとしてゐたと母さんはいふ。母さんはいまは

日本語をはなす。わねし達は蒙古語を知らない。父さんは

その後騎兵服をぬぎすて今は胴衣チョッキの金釧ホタンも合あはぬほど肥えた。  
さあもう一度写真をむらん。それから母さんキッスに接吻しに行かじ。

# 天上有事

二篇

南ノ方林足ヲ滑ル心宿ニ掛ヨ星ガ印田マワタトイフ號外ノ  
印刷デ階下ハ忙シイ

昨夜ハ支州ノ節度使カラ老人トノイフス星發見ノ飛報カアツタノ

クガ

閑ヲ偷レテ測天臺ニ登レハ兩相ガ雪ヨリ白イ

渾天儀こんてんぎニ葛ノ木ガヒツカカツテ枯レタ立自ヲ立テテホル

號外輸送ノタメノ馬車ガ今門ヲ出ヤウトレテリレント車輪ヲ鳴

ラレタ

サ蘇ー 盗星ヲ見キヤ

張ー 尚旨テ盗<sup>トウビキ</sup>蹈ヲ見ント欲セリ 而シテ未ダ天ヲ見ルヲ欲セス

サ蘇ー 天狼星ヲ知レリヤ

張ー 亂世虎狼ノ輩多シ 何ゾ天ヲ仰<sup>ウケ</sup>グヲ要セシ

サ蘇ー 招搖ノイヅクニアルヲ聞ケリヤ

張ー 公侯我ヲ招キ白馬門前ニ待ツ マタ天ヲ聞クノ<sup>ヒト</sup>遲ナシ

蘇ー 嗚呼<sup>ウ</sup>而シテ尚女<sup>メ</sup>名<sup>ナ</sup>宮<sup>ミヤ</sup>ノ在ルハ何ゾヤ 群<sup>ム</sup>星ノ陳<sup>チ</sup>ヘルハ

何ゾヤ

履<sup>クツ</sup>

私は身<sup>ミ</sup>に山<sup>サン</sup>椒<sup>シヤウ</sup>の臭<sup>ニホ</sup>ひを世<sup>セ</sup>帯<sup>タイ</sup>び蛇<sup>ヘビ</sup>である

私の鱗<sup>ウロコ</sup>は日<sup>ヒ</sup>を受<sup>ウケ</sup>けると金<sup>キン</sup>色<sup>シキ</sup>に光<sup>ヒ</sup>る

それは闇<sup>ヤミ</sup>では濃<sup>ノ</sup>い緑<sup>キナンド</sup>いろとなる

私の腹<sup>ハラ</sup>には紅<sup>ベニ</sup>い縞<sup>シマ</sup>が二<sup>ニ</sup>條<sup>ジョウ</sup>とほつてゐる

私は私の洞<sup>アナ</sup>に天<sup>テン</sup>南<sup>ナン</sup>星<sup>セイ</sup>を植<sup>ウエ</sup>ゑてゐる

その花<sup>ハナ</sup>は私の洞<sup>アナ</sup>をほの明<sup>アカ</sup>るくする

その根<sup>ネ</sup>を私は食<sup>ク</sup>食物<sup>シヨク</sup>にする

私は四五日来この間嬰女イレイシをおもつてゐる

嬰女はあの窓まどの仲なれぬむつてゐる

私はその紅い小こさいさいの復くつを見た

それは私が産うまの卵たまごをとりに戸と櫃びをつけた時である

昨日は嬰女イレイシの姉あねを棒ぼう切きりて擲なげられた

私は鮮あざ血ちを一部いぶ剝はかれてゐる

私は復仇ふくしゅうを折し言ごつてゐる

天南星てんなんせいの根ねを噛かんでである

懶もつこさ

今いま睡ねから覺さめると耳みみに毛けが生はえてゐた

爪あしやは土ちに食くひ入り  
趾あしに血ちが引ひかぬ



閑居

冬深くなつて庵にはいかり鼠の食物もなくなリかけたある朝

雨相の門前に耳かんぼ親女の啼き聲耳かした

オルフェエ

オルフェエは羊腸たる路を辿る

わかれは谷一ツこちらにゐて

あの路には紅い花がある 白い花が咲くと見えてる

オルフェエは路角を曲つてもう見えな

紅い花 白い花の路にわかれは入る

書目

ソオク水をよぎる雨云

葡萄<sup>ぶどう</sup>のゐる蟻

睫<sup>まつげ</sup>毛<sup>げ</sup>には陽<sup>ひ</sup>のかがり<sup>り</sup>の濃<sup>こ</sup>さが

たま弾

ころころと子供達は喉<sup>のど</sup>からラムネの玉を吐き出して

木の葉のせへづりを聞く

半ば虧<sup>く</sup>けら金星が坂道を駆けて降りて来る

くわう  
曠

雲はこの野の上を北から南へ澎湃と動く

雲間たてごとで取立琴たてごとの音がする

退屈をニコラス達が退屈を曲を奏してゐるのだ

彼等は弦を断つて雲から下げる

彼等は一羽の鳥を飼ふ

その灰色の生物を彼等は弦にくくしつけた

雲間で退屈を取立琴が聞える

懸命な鳥の羽搏きよ

十二月 四篇

I.

すかれぬ花はかすかに白

夕日はたのむら白まを紅く沈める

大根畑に犬が餓えてゐる

Madame Blanche No. 5  
Feb, 8

澤の小鳥が陽を<sup>せと</sup>さかめる

今年の花はみを咲いてしまった

やたしは陶器<sup>せともの</sup>に夏の花を描く

土俵盤木はいよいよ<sup>黒</sup>ずみ

晝も<sup>倍</sup>息を<sup>煙</sup>を<sup>ム</sup>つけてゐると

凍った蛇<sup>へび</sup>が天井から<sup>お</sup>落ちて来た

山腹に坐つて私は鐵道線路を眺める

灰色の雨のやいば豚の群が蹠むなから曳かれゆく

遠くの山頂で稲光りかした

## 故郷

天花<sup>てんが</sup>は半時ばかり見えぬ

弟の手はぬい両相<sup>しむやけ</sup>焼<sup>やけ</sup>が

いぢやん あさかな

氷の木の榎かどぢこめらゆてゐた

梅の花

春の公園の梅の花が咲き出すと

ほくの知つてゐる囚人が牽ひかれて行く

旦那 もうやさしくせの中を見せして下さい

頬の濡れた子守女たちが彼の世界へ来て坐る

ひょう  
風

烈しい風の中で

彼等はパンパンと空を銃をうつゝゐた

鳥たちは驚かされたやうな格好で

枯野に墜ちて逃げてしまふ

烈しい風の中で

パンパンと銃聲がっさいゝゐた

園庭

遊動圓木をゆれたる叫びの音

朝日に照らされた少女たちの

胴體トルソ

焦らつ思ひで見てるをわかしは足代たひを汚して

惡立

ひとひとはオルガンを悲しく奏し

サはな化環は葦しほれながら匂りを立て

母親たちを極ごくに横よこはつてゐた

すすり泣きの申ら虚構を見つけ

安心してゐるを惡立の自負に

春日旅

紙カミ + フキシフキシシ花ハナびらびらが散ちり  
ナイフの刃ハには 峨ガ々ガたる山脈サンミツが映うつつてゐる  
蝶テフがこの食シ卓ツク土車ツチクルマに舞マひこんで来た

岩手イワテ

眠ねつてゐる私わたしのまはりには  
誰たれかが白しろ黒くろ土つちで圓まるを劃かいた  
構かまはわぬ動うごくと漆しつ喰くの壁かべにつまみあつた  
引ひかへすと泥どろ溝ぼがあつた  
我わが鳥トリ鳥トリの啼ないてゐるやうな  
眠ねつてゐる私わたしに生なめるい膚かわ手てを感じかいた

<文学> 6.  
jun. 8



晩飯會

先生は老來酒精分を即してゐられる

「君は付 余もあすこゝろだ  
コレスケイナル カゼシ

さう49百三四年の頃

(僕たちの父母の未だ結婚してゐなかつた頃のことだ)  
僕たちはシネマの君府を思ひ出してゐる

海峡を潮が河のやうに流れてゐる

歲月の潮が先生との間にも流れてゐる

(河のやうに渦まいて)

L'ENFANCE

オルガン

その古風な樂器の中で

わたしの頭痛がはじまる

なにか思念に似たものが天井をかける

髪を毛をもつてゆりあがる

見えぬ手のたしかさ

青い静脈を透かせて

<文学> 6,  
Jun, 8

女  
辰  
日辰

軍鶏しやもが朝はやく人の家ををきこんで啼いてゐる

遠くで鐘ちやほの應戦おんせんのこゑが聞える

塙

鴿はこの來て踏あやちしの墓はこ碑

わたしの頭痛ブツウは永遠に置おき忘れられた

草いらくさ麻あか生える

わたしの骨てのこらの根をおろして

魁くわい山さん屋やの上の上で

海の揺する前庭まへぢやうの晝ひる餐ぐ長

尾を振る犬とエプロンかけた子供らと

塩しほっほい風かぜとを血ちの盛り

母はははどこかへ行つてしまつた

肉にく汁じゆかよめてゐる、子供らこどもらの膝ひざで

<Serpent> 29  
juillet, 8

<文学> 6.  
jun, 8

非心 占る

かぢりかけの幾片かのパとソオセエが  
食塩の瓶と並んで石竹のサ化 雑沓  
くすん却銅版畫の中で魚釣るひとひと  
凡そは人良卓より上にある

視 覺

坂のつき富りには華向サ微の垂れ下る甘露と一杯のバラの花  
茂みでフイロメエレがないてゐる  
空が覗きこんでゐる  
そこで郷食宴がもたれてゐるから

<Serpent> 29  
Juillet, 8

<Serpent, 27>  
Juillet, 8

廿四の頃けい

二編

I

黄金の髪に熱あつつた赤々と

並木の線とか燃え上るやみ日るとき

子供たちが歸つて来る、いろんいろんな彩いろりの着物をきて

五月の祝祭があそこで終つてりだ

2.

ガラス戸の向々に

子供たちのて手ちてやすつてゐる木が見える

白い花たちが雨のやうに

冷い空に舞ひ上る (ぼくは熱あつを病やんでゐるのだ)

ぼくの木をもやすれ もつと強く

子供たちが歌やうにゐるが

高地

アドニス、アドニス

灌木林を<sup>を</sup>銜する

鏡は山間の澄んでゐる

時々をこを横切る人影がある

海、その懐かしい

とやらが一つをるとき

帷のやいん<sup>急ん</sup>張は引おれゆく

さうして涯<sup>はて</sup>しないう夜が来る

隘路

懸崖の途中には此条の<sup>はまやら</sup>花竹筏が多い

滴る水がある

雲は<sup>の</sup>覗いてゐる

苔<sup>む</sup>蒸す山石のあたりから

<Madame Blanche>. 8

août, 8

かはせみ

たに 谷の白いのはあはは百合

田舎中よあやうなボンネをかぶるひとはさい

いんし 蝸は啼く高い梢で燃え残りの雲の中で

たに 終つ水をつかぬ音かする

名水眼

黒檀の匣の外側は

寶石をちかは窮屈と押しこめられてゐる

なかひはめ女たちが眠つてゐる

詰め綿や白い花をとも

白の柘榴石か名水眼して

# 挽歌

黒い晝顔の咲き揃ふところ  
あけらの歌かほくを慄へ上らせる

二度とうしろをより向かい

夕焼空の下あゝの影は

鳥たちの啼きやめぬ後で

あけらの歌かほくを取巻くのだ

# 國境

海から吹く風に

華やかな旗はみな山に非靡いてゐる

馬車などは白黒チヨークの線で止められる

巨大な差し伸べられた腕である



愚心者の知拜る

われしは知つてゐる

遠く虹色の陸地のやうに見える雲のうしろに虹色の陸地  
のわくされてあることを

この半球を充つてゐる生命ある液体が凡て一様にほろ苦  
く鹹いことを

われしは知つてゐる

われしの船を追つて来る鯨や鱈や鰻やなぐりか好んで赤い  
脂髓を貪り食ふ残虐の徒であることを

われしは知つてゐる

いれもす流れる海の草が紺色の水泡の下で船の進路を阻  
むことも得せず踏みかかれゆくことを

さうしていま槽の上の鷗の金切聲でもつて

「人が陥ちた」と叫ぶと云ふ音が同じい海の岸邊しんすをな  
いこと

その時われしたちの船はしつしつと船首をもとの流の方へ向け  
変へるやうが。

その時われしたちの船はしつしつと船首をもとの流の方へ向け  
変へるやうが。

旅で

老衰した火山がその壯年期に堆積した膨大な容積の熔岩を  
 波の間に見てゆくこの旅はたしかに壯麗なものであつた  
 羚羊の駆けるのをいかにびも見ながらそれはプレートオペと呼ばれる  
 よりむしろ陸の飛魚とも名づけられはいい  
 木生羊歯菌の叢生した斜面では太陽は地肌まで斑になつてゐて  
 魚たちはその中で皮膚を痛むいろとりするがそんな滑稽をも  
 何か神秘づける理屈があるものぢ

僕の見えのは噴煙の團々なんなんすぢなかつたかもうそやで吐胸とちやをつかれ  
 悪魔のやうな噴煙のこゑを耳のうしろで受けて木生羊歯菌の杖  
 を棄てて退散する小悪魔がある  
 僕の船さへもしもりやれると波の穂をかきへながら退散しはじめた。

<Madame Blanche>, 11  
 Nov. 8

山家

雲の間からヘリコオンが見えん  
かニユメートの草地には

帽子と煙管たせろがサ落すてゐる

生意氣な小僧は夕方にも帰こて来ない

雨田の音がしまり、納屋やの隅までいなづまが身みしこむ

鶏けいが卵たまごを生なんでゐる

青い驟雨あめが木きの隙すきつて来む

<Madame Blanche>, 12.  
Déc. 8

糸丸山

太陽を一面に受けた白っぽい断崖がある

鴉カラスの波がその裾すそをいそく移る

音を立てて菊の花の開く畑

眠ねつてゐる人は花を折り

幽こもり見みてゐる世よがそれを影かげ交まじりに挿さす

鴉カラスたちは一齋いっさいいで飛とび立つ

しばらく太陽がけが断崖に残る

午後

巾着は縮いになったシャツを着てある  
横腹のところを魚かくすくつていつた  
巾着の前はゆるかあり巾着しか蹴ると轉ころかつた  
頭たまご痛いたませる重い雲が  
鈍にぶい音楽か砂の間にある  
巾着は結のシャツを引き裂きをいた  
もう巾着の糸は流れてある

登山道路

巨きく傾いた高原の傍かたはらを通とほつて  
山脈の方に近づく鐵道は  
いるが軌道に横はつてぬるので停車した  
— そんば一匹のせんぐんかう穿山甲せんざんかうにすぎなかつた  
ツツガムシのひそむ雨路あるすすきの叢を  
ひとびとは恐いながら車窓に指さしたが  
既に濁水溪は清水溪と變じ

<Madame Blanche>, 13  
Février, 9

雨を頂い出高山たすし

裾の藍<sup>あざ</sup>ちけで十分<sup>おほま</sup>巨い

あぢアナスの畑に立つ子らよ

わかキヤラメル<sup>あ</sup>の空き相をひろへ

それは弾丸のやうに

客車の背後へ飛び去った

機関車は最後の熱い一息をマンゴオの樹<sup>は</sup>に吐きかけた

嶮<sup>けんそ</sup>な山路を駆けるには

この自動車は老ひぼけてゐる

櫻<sup>おう</sup>の杖もった目黒力團が

その中で吐<sup>はき</sup>気をもよほし出した

バナナの傾斜を曲れば

蛇形の大河はもう銀色の一流れ

水牛が雲かゝる<sup>せんざん</sup>嶺<sup>うね</sup>山<sup>さん</sup>そのむくである

その尾の向く方で<sup>た</sup>谷<sup>や</sup>の聲

パイア、檳榔<sup>びんろう</sup>樹<sup>じゆ</sup>、バナナの花

苦受生植物の林にツマハニ蝶<sup>てつ</sup>が消えた

水が見える耳環ナメのやうにキラキラ光り  
そこから道は下さかる一方

到頭一つの街にづく

トランク提さげた字生は

さびしく茶カ團に別れの挨拶し

ホテルのある高地まで石段そのぼる

湖の魚捕る歌が道づかける

ホテルでは「いらっしやませ」

つきあたりの欄らん向に世よ類ぐの願がく

すべり廊下を怖れてゐるのは

先に着いた肥大症の老婦人と

黒眼鏡をかけたその夫の教授だが

湖は山々の足を洗たふらぬ

夕ゆふバコをみかすのが現はれる

お茶はなかなか来ない

パイアの宴かゆれてまた青い

廊下で女中たちが押しあひしてる

「このお客様はなんと細いんぢらうし

ホテルの書<sub>一</sub>食に十尾の魚が

無念<sup>あゝん</sup>に殺せれる

海拔は二千尺

島の中は玄武岩の塔だが

いまは雲の中で三角の山が並ぶ

湖をゆくボートは白い

それはゆめゆめに土人の部落を訪問するのだが

向ふには内地人とゆめゆめやかつてる

雞<sup>けい</sup>屠<sup>と</sup>るお祭と

毎夜やらせれるのはいやなものだ

唄に安楽い節をまじへたりする

こんな方法で一つ、民族が七ぼせれる。

流域

こころは山岳地帯のやうに音楽がよく聞えて

青銅のらちいろの山灰が青黒らんでゐる

馬たちが鞍がけると道は通れな

砂利の上へ熊のせから蜘蛛くちか出て遊あそび

日暮までそこは日があたり食物にことかかるとさう

植木屋

遠い海から波が来て

眠ねひるすぞに山茶花さざんかを植うゑる

庭のせきは枯れ日陰では土がくづれ

家甲かこうの留守留守をして

もの吐は白しろ変へ改かすと書かきと讀よむのに

土つちを出だしてよみ悲かなしく思おもふ



小鳥達

晝過ぎになると刈株のまんな水田では

氷かみみわれはいぬる

小鳥たちは枯れ草の衣つけてその上を歩か

渡り終つてうしろをよらへると

あゝ、とう氷が足跡を埋めつくしてぬる

早春

ススヘンはひん纏ひんと鳥を飼つてぬる

お天し氣の日ははそぬは

紡車つむぎぐるまのやうにぶんぶん唸り聲を立てた

あのその日を限つて暖い氣候が来

窓の外まがらひの樹木の枝がたわ揺めはじめる日以來

ススヘにはその鳥を干ひ乾ほしたした。

一日

雞と山羊の小屋の手入れにこの白曜をすらす

蜜蜂は梅咲く晝ちうを眠りついで

キエス指すひとらは日向にぬた

枯草+林のうら二ほろぎたちか可哀想に焼け

ハイプのやいな煙穴犬から煙が忙しくて日か暮る

靴を磨くのをよめてた。

天  
秤

鴉からすが啼くと風が止み

花ギヤベワの開ぢる音がする

こゝわたしの脚下に地軸は立ち

わたしを中心に

日か傾けば月か騰たかつてくる

Nan, 4, avril, 9.

Pépée, 4, avril, 9

西康省

(二九。行)

X

歌  
唱

彼等が口をあけて歌ふとき

その口腔はうす紅い

—それと俺は永い間愛して来たものだ

甘方はしい微風が甘薄い雪をひく

その奥で歌をけかいつまひも残る

世界はその方かしつと美しい

灯はゆるる それらの歌にうけて  
悲しい南きあまた歌だ

四つ辻では花が咲く

こめかめに弾丸の痕がよる男

そのいとか俺におしおそくれた

俺は眠る

ゆるる灯はゆるる

x

# 日記

7.

うすい血の色の林のなかで

小鳥は啼きはたまきしてゐる

風は軽やかにさるこゆりを動かす

時々口笛を吹く

自由な水が流れては

すくすくというに沈まってしまう

夏は石榴おくらの4エーブからおし出される

終日いちじつおれは埃ちりの噴泉ふんせんを見る

とここぞで喧しく犬がおて

晝はひと気がない

おれがいふほせておると

てつらう 両手かとはくでふるかへつてゐる

山に近い 先けてゐて

あれを思ふよと海かふるかつて来る

うねる波と輝く波とが。

白石

潮風を吸つた時

海の薔薇園と野菜畑を理解した

あそ二では花は藍色の敵いねになつてゐる

子供たちは覗くとのぞ歓聲をあげ

青い 青いと呼ぶ

鴉が降りて来て彼等の眼を啄ついた

Syntax<sup>(4)</sup>, Count, 9.

蝶

一葉の中に烟がある

老いた<sup>コキスニシ</sup>に子士は<sup>サモモ</sup>木の下の垣から外

青い蝶は静かに夏を過ごす

けろ方々で舞臺があつた

### 湖水

水の申ん<sup>長髪</sup>

かろほねのサ化のヤリん金色で

あふしそつ歌が湖水を渡つたことがある

舞臺<sup>シテス</sup>のかけから夕もやか立ち

暗い水の中をかみのけは閑いな。

権の木, Oct. 9.

玉今のうた

おことひそめは香ばしい風で来

昨とは雲でもつて中断された

黄色い小さい花が咲き

鳥が来鳴くサ敷と警茂し

雨の中にまらきと  
揺うた

長い夜

ゆたしたちの歌かほに昇り

雲のまねつはしから雨生が降りた

おとしおひしおちいさんとおはあさんかあり

オルゴールに倚つて死を懐つておれ

権の本, Oct. 9.

Etoile de mer, Sep. 9.

鳥

おんは塵芥とことし川を下る

一ツの鳥に上陸し

夕焼や曉のいろを見て

高いる段を登ると

海も陸も限りなく廣かつた。

朝

世界中に鏡が鳴りわたる

リンリンリリエンクオオンー

ツタ  
鳥うからんか塔よ 朝はあはるる段よ

誰かが通りに手巾をおとして行つてる



蛇フかひ

誰かおこのるの上で  
赤棟蛇やまかがしを殺しものだ

こほろむか啼くすわしいはこ

本林で羊し止だ齒か鳴つてゐる

日向ひなたの水でサ女が髪を洗つてゐる

首かみ途で

山やま魏ぎにたる峰みねに日輪は射やす

朝は小川に

草はあかい田舎あそ

きりきりすはつたよ

旅リョウ裏ウラはもういらくな畫で一杯たが

春

あるは高い山にのぼつて俯瞰する

谷間に人や馬が群れてゐる

そのあたりは隠れて僧院があるのだ

寒い山頂や紅葉やる塊や

高原の隅々には歌があり

夕方まで甘く春して山を降ると

白雲の中へ迷つてしまった

春令

都會のまん中で棒の海を渡る

友達は公使館や仲買人になつた

すべての作品は子供の玩具

夕方わしは影を巻いて立ち上り

みりかへるとさびしき春をいたるとはちり。

Quatre Saisons, Jan. 1935

日本歌人, Jan. 1935.

古典

イオニヤの山には海豚が遊ぶ

春のサラミス 巖に草花咲く

ヘラスのひとは青と黄色と

すべて酒達りのいろを好み

酒宴には手を叩き

花の儀は首垂れた

6年 野人, Jan, 1975

寒鳥

杳かに道を来てふりかへると

雲際をさまざまの旗立て、行列が逝った

ゆしは山や谷に分け入り

懸崖に菊の花を見たが

菊は眼前に瞳ま、懸崖は

掌の指のやうに裂けて見せた

わしは土戸を出してほうと喚び

一聲のあとに幾声も出た

四季 Mars, 1935

古驛

紅葉の美しい谷へ街道は上つてゐる

毀れた水車や投げ出されてある車輪

ひっそりと山村は静まつてゐる

鳥が街道を歩いてゐる

休息に一軒の扉を敲くと

白髪の女が現はれて

入つてもいいと手と真似でいふ

このあたりで言葉は盡きて了つたか

四季 Oct. 1935

多島海

何かわたしをおどろかせたのたらう

その多岐の入江にわたしは踏みまよひ  
海月と海苔の間に神々を見た

夕月のやうに輝く額をもつちみせ  
眞紅の穂になつてゐる舌を吐く  
山茶花に似た唇の貝殻をた

太陽光のあまゆく照らすやうに

たのしい色んを思ひ出がこの夕あかりに  
凡てかへつて来る、古代の説話のやうに

血にまみれた植に似た島かわたしの  
前面に暗く立ち塞がり

背後から太陽に照らされてゐる  
わたしの立てる波かまが彼の脚に及ばない  
彼は様々の樹木をもつてゐて  
それから雨路き出しの肩と額頂とをもつ

わたしを裏巻いて黄は白がある

わたしのまはりはずべて波打ち  
すべてか歸邊のために忙かしい

やちしは出発する

その多岐の入江を身をくねらせながら  
脂肪粉で粧よそはねばならぬほど女倉おめて。

ある日 中島榮次郎に

「ホーレト」  
「カインマンナ」  
I even や Musicalmanach では随分時間を費した(ガエテ)

レッキングヤシレルも少年の日は

感傷を歌ったが今年よつて固まった

今年はニュースが遠くへ行ったので

バラや夢を見ても心を動かさない

遠い都会の車輪どうどう々の音や

竹管樂器や絃樂器が時々耳を聳くが  
泉の聲は小さく 海の笛は大きすぎる。

### 歴史

低い草たけから成つてゐる島々

荒天には煙つて見えなくなる

昔そこにオランダ人の館やかんがあつた

老人は天公廟テンエンクンミヤオから骨董品ボウドウヒンを持ち出し

われに説明料を要求した

# 奇蹟

ある晴れた朝、発動機船の第三住言丸は  
五色の幟ウホリをひるかへして、最初ウホリの船出をした

(村中か濱に集つてゐた)

発動機の音は次第しだいに小さくなり、やがて

倒れるほど傾いて、彼女は進路を北にとつたが

その時ゆくては晝の星がキラキラと輝き出で

犬たちは奇妙な咆ほえ聲で啼きはじめた。

四季 Jan. 1936

# 老公園

櫻の咲くころ親子が来る

200では孔雀くじゃくより蛇へびが可愛い

猿や熊は人の森林で狩かりされて

ナニキン豆で銃殺される

鶴は啼きどじょうを食くべ

聖家族は正午てんどんに天井を食くべる

父は子に竹はし箸で食くべさし



母は財布さいふを出す

歸つてから疲れを子供は泣き

夫婦は欠伸あくまをする豫感。

### 玩具のせり

水の中へ落つてさうを恰好で

眼鏡橋では男が覗いてゐる

日はまゝ通りを横切らないが

法院の塔からは郭公くわくこうが

十二度啼いてから飛立つた

兵隊が河岸かみを徘徊してゐる

爛漫らんまんと咲き乱れ木きの花。

Le Serpent, Jan. 1936

Le Serpent, Jan. 1936

催眠術

銀の峰々、黄金の原

ドイツにまよい一流れ

サクセエの王、ハイエレンの公

カルルスブルクの高インリヒ

リネデン咲けば猫歩む

裏町花束 地下電車

二階に造花屋

三階 医療器具商

四階 美容室

五階 園芸倶楽部

六階以上は雨云の中

バルリ中か花ざかり

人に見られて散歩する

フリードリヒ・ホルヘルム四世の銅像前まで。

大鳥とび

俺はとぶ

日はすでに傾き風が強い

感情が昂たのおつて弧ながとく描かけをい

冷い虚空そくうで

俺はひとり言をいひ

涙を流して――

獲物にまつすゝに隊お士ちかかる

鳥

悔恨とはほど遠い

日の夕方には高めにまゐる

ここから見れば

すべての世いとこの何なにとやらちがいと

この楊桃やまももの林をめぐる水は

三度めぐつて町へ流れ隊お士ちる

生者

横卧してしづかに息吐いてみると

人々は影のやうにまはりを去來した

道は自分の左右で光のやうに屈折し

手ものはすと人々は羨望を

もつてみるや籠から掴み出してくけた

自分は心<sup>しんぞこ</sup>底から樂<sup>たのしみ</sup>くて立上り

卧<sup>ね</sup>てみる場所を見ると色んな花が咲いてゐた

冬海のほとりに住む

夜更やけ目覚めてもう眠れぬ

海はまるで大空を紡績工場のやうだ

絶間あない車立音のあふまに

疳か高い女工たちの鄙歌ひなうたや

テノールの野監督の比り声かまじりー

や、あつて終業の汽笛、微かすかに声長く

いやあは十二時の最終航路

幾いく百ひゃくの寝相ねざうの悪い夢ゆめたちを載のせて。

死者

谷に一本の櫻の木の下で

きみは青い顔色で坐席を作った

何かするなと見てみた

空が騒がり出して、準備が出来た

きみは坐つて眼をつぶり

死相を身に帯いた

鳥が眼の前を一つ過つて飛んだ。

急務な時間

教師

灰色の海から熱い風が来る

生徒たちはやけに大きな声で斉唱するせいじやう

それは蜂か否それは蜂でないそれは蝶である

その声で最も大膽不敵な生徒がやつ

寝息をたてておこらぬしまぬ。

生徒

鈍<sup>にぶ</sup>い蜂の羽音で眠ってしまったら

目が覚めることあたりは暗澹<sup>あんたん</sup>としてみる

この一日が終り、多分、殆ど確実に

あしたの朝はまた単調な一日が来る

喧<sup>わづ</sup>い<sup>た</sup>か<sup>は</sup>は四辺をわめ廻す。

俺は悪魔さー

俺は悪魔を呼んたら悪魔はやって来た

顔色のわるい瘦せた、眼尻に皺のある

気の弱さうな男なのに一寸<sup>タコ</sup>駭馬かされた

俺を見るとお辞儀をして、世間<sup>せけん</sup>並の挨拶をし

俺の研究がヒラキ行<sup>い</sup>つておかじりかを訊ね、

自分も近頃マルキニズムを卒業して

神<sup>カミ</sup>皇正統記と古史徴開題記と読んでるー

理由は他でいらない、テキストが安いからだ

小説や詩はつまらぬから君も読むと忠告した

俺はいつと見つめて、此の男が

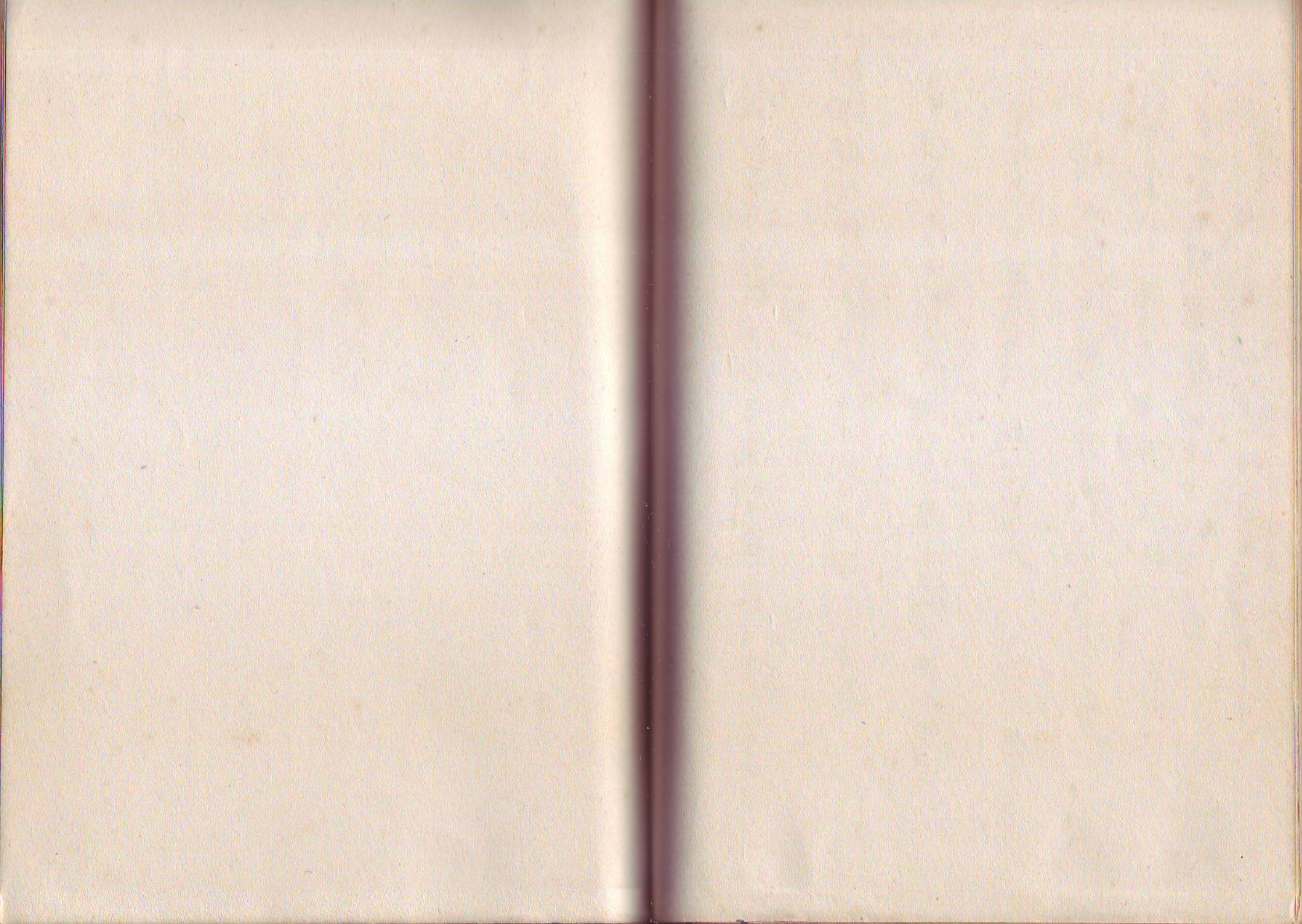
以前、大学で煽動演説をやつて

言論官に引張られた男そのを知つた

彼はその時、悪魔的な方法で

そこを逃げ去つたのを一時有名かつたー





田中九郎詩集



一九三三年三月以降